

「約束のとおりに」

ルカによる福音書 第2章 1節～7節

説教 岡村 恒 牧師

「ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである。」（ルカによる福音書2章6節～7節）今日、世界中でこの御言葉が読み聞かされています。週の初めの最も大事な務めである神を拝むことに世界中の人が時間を費やしているのも、この時期、ほとんどクリスチャンがいない日本で、光があふれているのも、この御言葉が事実だからです。

私たちの人生に唐突に「ところが」という言葉で神の救いの計画が割り込んで来たのです。皇帝アウグストの絶大な権力の元、人口登録をするようにと命令が出ます。身重のいいなづけの妻マリヤを連れて道のり120km、標高差もおよそ1000m程あるベツレヘムまで厳しい道を旅させられました。宿は一杯で若い夫婦を入れてくれる場所などどこにもない。全てが悲惨な暗闇の中で起こる時、「ところが」と神の言葉が響きます。神が用意した時が一刻一刻迫ってきて溢れ出たと聖書は書きます。この夜、羊飼いのところに突然光が輝いて、彼らは天の軍勢に囲まれます。聖書全体はクリスマスの出来事をこのようにして激しい仕方描きます。

神のひとり子が人間となって、この地上に来てくださった。こんな理不尽な出来事など他に類を見ません。この神の救いの計画は、長い時間をかけて周到に用意されたものでした。旧約聖書の預言書に神の救い主の誕生が約束され、人々はその時を待って来ました。主の到来は、世界を根底から変えてしまうと信じ、地上での平和を期待しました。しかし、身重のいいなづけの妻を連れて困難な旅をしなければならない夜のような現実が、世界を覆っていました。

クリスマスの物語ははるか昔、遠い場所で起こった小さな出来事を描きながら、同時に、この場所、この時代に、私たちの人生を重ねるようにして神の御業を描き出しています。世界には、人間の知恵、知識、力、科学の知識や、自分だけ利益を得ようとする欲望、私たちの内に抱えている闇があります。人は生まれながらにして罪人で、神の怒りだけを受けるにふさわしい存在です。「ところが」、と聖書は語ります。あなたの人生の真っ只中に、神の計画の時が入りました。月が満ちて、あなたのために救い主がお生まれになった。

私たちが住むこの世界を、聖書は暗黒の地と呼びます。人間の罪の故です。そのことを聖書の光に照らされて思うとき、恐れと悲しみを覚えます。もし神の「ところが」や「しかし」という言葉が響いて来なければ、私たちには何一つ希望が残りません。今、クリスマスに世界中で光が溢れています。この世界が闇で、クリスマスに闇を切り裂く光が照り輝いたからです。今日はクリスマスツリーの蝋燭にも火を灯しています。光は私たちが闇から解放するのです。

今日、1人の姉妹、1人の兄弟が罪の赦しの洗礼を授けられます。主イエスを救い主と信じる信仰を与えられたからです。今日ここで、罪人が葬り去られ、新しい命を与えられた者として歩み始めます。洗礼式に続いて信仰告白式もあります。パンと杯を受けて、キリストの命が人を生かし、地上の旅を終えてもなお生かして下さることを、これから食卓につくたびに、確認しながら生きるようになります。

信仰を持ってこどもたちの一切を神に委ねることが、親の最大の努めであることを信じて、幼児洗礼式が行われます。幼児洗礼を授けられた子は新しい命を得て神の子として歩み始めます。幼児洗礼は、人間がただ神の恵みによって救われる、そういう一番大事な事実を私たちに見せてくれる奇跡の出来事です。

その後、3人の方が転会式を行い、日本基督教団の他の教会からこの大阪教会に籍を移します。地上にある教会は主イエスの命がその幹から流れ込む大事な枝であります。今日から大阪教会という枝に結び付けられて信仰の歩みが続けていく、これが神のご計画であると信じて転会をなさいます。

世界中で読まれ2000年以上に渡って読み継がれてきたクリスマスの物語は、毎年いや毎日、新しい響きを持って読み聞かされてきた言葉です。あなたの人生に今日、神の時が満ちた。誰でも主イエス・キリストを救い主と信じ、その信仰を告白して洗礼を受けるなら、その人は新しく造られます。あなたはもう暗闇の中を悲しんで生きる必要はない。死から命に移され、永遠の命を持つ者として新しく歩み始めて良い。聖書は私たちが漏れなくクリスマスの光の中に招き入れ、その光の中を歩ませてください。

（記 説教要約奉仕者）